

越後路の篆刻家・山田寒山と片野松外の接点について

岡村浩

序

稿者はこれまで本誌「新潟大学教育学部（教育人間科学部）紀要」に「越後路の篆刻家・山田寒山」と題し、七編を攷々と連載してきた。寒山（一八五六―一九一八）とは愛知県生まれの永平寺派の僧。小曾根乾堂、福井端隠に学び影響を受け、芙蓉派第一を自任した篆刻家。あわせて詩書画、陶芸、帙作り等多岐にわたり独自の存在感を示し、各方面で関与した人は多い。中国蘇州寒山寺の再興を期し、梵鐘を新鑄して贈ったのも芸苑に語り継がれることで、そのために多作、殊に墨竹をよくし、活動を推進するに当たり伊藤博文をはじめ、名士の助成と交誼を持った。明治後半から大正にかけて残る畸人たる話題が、豊富に挙げられる。

越後との関わりを要約する。

- 良寛堂建立の契機となる提案を佐藤耐雪に行った。耐雪は三島郡出雲崎町の旧家で俳人。良寛顕彰に半生を捧げたといつてよい。
- 新潟の印人・木村竹香の求めで羅漢鈕印十六顆を刻したのが、寒山代表作の一つに数えられる。のち竹香は『羅漢印譜』を上梓。
- 木村竹香の次男・正平を養子に迎えた。
- 「墨竹十万講」作品頒布の全国巡遊の第一歩に、越後の地を選んだ。
- 近世篆刻の参考書として、越人・富（取）益齋編著「印章備正」を見出し、自身の手によって公刊する。

挙げたように越後路との関連は深く、かつ県下広域に及んでいる。この

点に注意し、本編までの七編では本県各地の寒山の動向を縦軸に見立て、接触のあった各地文人の存在を浮彫りにしてきた。よって、地域芸芸を発展させた人々の埋没しかけている事績を明らかにし得た点は大い。

たとえ僅少な出来事でも拾遺しようとすれば、まだ多くの越人との関わり合いが指摘可能な資料が残っている。そこで本編では、引き続き調査成果として新潟県三条地区・旧栄町（現三条市）の片野松外（一八六一―一九四一）について、寒山との接点を意識しつつその文人像の紹介と分析を行うものである。

略歴

通常の県人名辞典の類に出していないが、出身地では過去に二回顕彰事業が行われている。

- 栄町農村環境改善センターにて 平成七（一九九五）年十月
- 三条市歴史民俗産業資料館にて 平成二十一（二〇〇九）年一月

その折の資料に基づき生涯を記す。

文久元年（一八六一）十一月二十七日、猪子場新田（旧栄町・現三条市）の庄屋坂井家に生まれ、明治九年四月、十六歳で大面町の庄屋・片野寛十郎の養子に入った。本名幸次郎、字は士慶^{しけい}、号は松外の他、嵐南、屋号を聴松書屋と称した。活躍の舞台は南蒲原郡で、当地は三条と長岡にはさま

れた山と川と緑に囲まれた風土を保つ。JR線であれば東光寺と帯織駅のエリアに当たる。

明治十八年（一八八五）三月、二十五歳で新潟師範学校を卒業。中之島村中通小学校長を皮切りに、地元大面の大潟小学校に転任、二十五年の長きにわたり勤務した。明治四十二年三月、大潟と帯織尋常小学校が統合され大面尋常小学校が創立した時、初代校長を務める。明治四十三年から大正二年までの四年間、再び中通校の校長として勤務。

教員を退いたのちは、大面区長、大面村尚武会会長、村会議員、教育会会長、信用組合監事等の公職を歴任。

また大正五年（一九一六）十一月から一年間、その十二年後の昭和四年の二度にわたり大面村長に就任した。

さらに昭和十一年八月、大面村保健協会初代会長に推された。

以上、教育と産業振興、保健体育の向上等、幅広い方面で地方自治を牽引した事績が読める。

晩年は悠々自適、書画及び漢詩の世界を大いに楽しむ。太平洋戦争の起こった昭和十六年（一九四一）十月三日、八十二歳で逝去。

重複するが、他書に窺う片野氏の経歴について引用しておく。

○「片野幸次郎 南蒲原郡大面村、漢詩が得意で、書画に興味がある」（吉岡金峰編著『越佐趣味の人々』S13刊所収）

○「片野松外、名は幸次郎。松外と号す。文久元年福島村（現栄町）猪子場新田の庄屋坂井家に生る。明治九年大面村（現栄町）大面の庄屋片野家の養子となる。新潟師範を卒業し、大面小学校長、大面村議大面村長を歴任し、詩、書、画を善くした。書画は諸橋田龍、庄川松陰に師事し、詩は鱸松塘に師事し、浅野赤城、岩田愛山などと交流した。昭和三年土屋竹雨藝文社を興し、東華を発行した時参加し、中央詩壇で活躍した。」（洲脇五東編著「片野松外詩鈔解（第一回）」『風城雅韻』第四十四号所収、H14・8刊）。洲脇氏は三条市在住の詩人で風城吟社を興し、その機関誌の四十四号から五十二号（H18・8刊）までに「松外詩鈔解」を九回にわたり連載された。

教育者の家系

①庄屋に生まれ、庄屋の養子に入る。②学校教員。③村長。——これらは近世近代の文人を調査してみても、しばしばあてはまる事項である。出自に恵まれたことに続き、まず新潟師範学校で修学した。

明治五年（一八七二）「学制」公布を受けて、本県でも学校創設と統廃合がくり返され、明治十年（一八七七）に中学部と師範学部を持つ新潟学校が誕生した。この師範学部が独立して「新潟県尋常師範学校」となる。松外が学んだのはここである。また、『大面村史』（S45刊）をひもとき学校教員の頁を読むと、教職歴を確かめられる。教育の充実を目指して一校をうたった大潟尋常小学校と帯織尋常小学校との合併がたやすいものではなかった中、八七六頁また八七八頁には「大正十年度より七ヶ年（大面小学校学務主員を再任）」と記載がある。

松外の長男・寛一郎も小学校長、その娘・千代（明治四十五年生）も三条高等女学校・長岡女子師範学校を卒業後、長く旧栄町の小学校に勤務。千代の夫・弘（明治四十年生）は新井（現妙高市）の生まれ。増村朴齋の経営した有名な「有恒学舎」で学び、また早稲田大学英语科を卒業後、定年まで県立三条高等女学校（現三条東高等学校）の英語教師。昭和十五年（一九三〇）、政府は、教育勅語発布五十年記念として全国から教育功労者を表彰したが、その中に片野家も選出された。「親子三代教員の職にありその内の一名以上現職にあるもの」として全国的な表彰を受けたのだった。本山高平著「戦後体制下の女子中等教育について（最終回）——女子体力章検定・当市防空教育訓練要綱等——」（『ふるさと三条』第22号所収・H26三条市生涯学習課刊）を参照されたい。

このように揃って教育者一家で、皆生涯を地元学校教育に捧げた。

漢詩について

松外が活動した昭和初期、漢詩の付いた「南画」と称す日本画や、自分

で詩を作り自筆を条幅に仕立てるなど書画の制作が盛んになり、プロ・アマ問わず各地に筆をもつ趣味家が出た。家々には床の間があり、掛軸を鑑賞する空間も存在した。

先の洲脇氏の文にあったように、昭和三年には漢詩の布教を目的に設立した「芸文社」から、月刊機関誌『東華』が発刊されるようになる。松外作は殆ど毎号に掲載されており、熱心な打ち込みと詩作水準の高さが推しはかれる。出版編集に関与する著名な詩人による添削指導が行われ、地方と中央、有名も無名もなく、同好の士が交流をもったのがこの時代までの特色である。今となれば意外なる文人が越後を訪れ、当地の顔役だった松外のところにも逗留したのである。その証拠となるのが、片野家に伝わった多くの書画作である。

『東華』誌での詩の添削指導には、土屋竹雨・国分青厓・岩溪裳川・仁賀保香城・田邊碧堂・岡崎春石等、斯界の大家が揃っていた。こ子孫のところには、この珍しい『東華』誌が一五七号まで通巻で保存されている。うち、誌面には一一一首の松外の詩が数えられる。別到大正・昭和を代表する全国の詩人の作詩を収めた冊子にも、松外作が選ばれている。『昭和七百家七絶』には、「寺泊懷古」と題して

曾自迎變五百秋 曾つて變を^{れん}迎えしより五百秋

回潮寂莫夕陽愁 回潮^{かほろ}寂^{じやく}莫^{もく}夕陽愁^{しゆうやうしゆう}

淒淒不斷漁人笛 淒淒^{せひせひ}斷^{たぎ}えず漁^り人^の笛

一髮青山是佐州 一髮の青山 是れ佐州
が収録されている。

『東華』編集に当たる中央の詩家に添削を仰いだ詩稿が、一定量残っている。詩作に「乙未二月十五日(明治二十八年・一八九五)片野幸次郎伏乞」と本名で署名。添削を乞うた人物は、「菊池九江先生尊擲下」と宛名を記す。時節柄日露戦争を素材とする詩作に、九江が朱批を施している。字句の批評を行う筆跡が上下の欄外、行間にあふれ、懇切丁寧な指導の有様が紙面に読める。

松外の原作を掲出せず失礼するが、九江の朱批部分の一例を拾い示す。「是レモ面白シ 天歩艱八天子ノ災難ニ遇ヲ言 然レドモ連戦連勝ノ今日

ニハ適當セズ 不吉ノ文字也 故ニ削ルベシ」此詩モ宜シ 然レドモ漢然トシテ一首ノ骨子無シ 故ニ 句ニ勢力アレドモ趣旨ノ分ラザル激論ノ如シ 故ニ一首ノ骨子無シト云ナリ」七言ノ句ヲ作ルニ上ヨリ四字目ニ平字ヲ孤用スルハ大疵也 詩人必ズ戒慎スベシ 當今学士ノ高名ナル蒲生重章又ハ岡千仞ト云人々ハ度々此格ヲ破リ詩人ノ笑草ト成ル也 蓋シ知ラサルニ非ルモ俗ニ云ゴマカシヲ作ルナラン」と手厳しいくだりもある。

思えば書表現や篆刻芸術も、古来伝統的規矩を徹底遵守した人と、それを破つたようにみられる作家では、残した仕事の性質が大きく異なる。詩の世界においても、蒲生や岡氏といった名の通った人物をかように批評する士がおられた。松外は、伝統正統派の詩をこのように個別指導によつて学んでいたのだった。

松外の書画作について

周辺に乞われるごとに気軽に筆を揮つた。概してこのような人物の子孫の家には作品が残らないが、松外の場合、比較的多くの遺墨を拝見出来た。水墨・またはごく淡彩の絵画で、内容は山水図が多く、他に寒山拾得や大黒天、達磨図等。それらの上部に、自作の詩をつづけ書きで付記。大幅が多い。あとで家族が表具したものが主で、生前の自娯作が未表装のまま一定量伝わったのである。

制作年の判明するものの古い例に、中之島町生まれの画家として知られる浅野赤城との合作がある。松外は七言絶句、赤城の山水画の署名に「辛亥晩春写」とあることから、明治四十四年(一九一一)作と分かる。他の年の筆跡をみても本作と同じ細線で動きのある行書体で、この書風が早くなるの松外の本領であろう。

同じ赤城作「紅葉花鳥図」の軸裏に、「片野幸次郎為我中通校長四年今茲大正癸丑以病辭職將還其郷 同人相謀囑淺野赤城製楓菊図以贈聊表惜別之意 且資他日追憶云爾 中道学区」と墨書がある。先行資料に基づき、はじめに教員歴を記した中、中通校在任を最初に挙げたが、軸裏の記述に従えば、明治四十二年大面校長就任を最後に教員を退職したのち、明

治四十二年頃から大正二年(一九一三)、この赤城作が完成した時まで再び松外は中通校に校長として在職していたことになる。病を得て故郷大面に帰るに当たり、中通校から贈呈されたのが本軸である。数年後、一回目の大面村村長に就任。

次に松外自身の書画作に言及する。

「千秋万古 丁卯夏至 松外山人」と画讚のある水墨高士図は、昭和二年(一九二七)作。「乙亥晚秋」作の秋景山水図は昭和十年(一九三五)作。伝わる松外作の制作年代は、長い年月にわたるものが点在している。

「子孫の記述によると、不惑の年を過ぎた頃から絵筆をとることが多くなつたらしい。特定の師がいたかは不明だが、伝記類では近郷庄屋で画家・庄川松陰(一八二九―一八九六)と渡辺鴻業(一八九二―一九六八)の名が、子孫の記述にみえる。そもそも松外の雅号に「松」字が付くこと、鴻業の淡彩画で目に付く赤茶とうぐいす色とが松外の淡彩作にも多用されていることなどは、影響なしとはいえない。加えるに浅野赤城も身近にいた画家として名が挙がる。しかし、職業画家の赤城の画風とは、距離がある。総じて詩作を中心とする教養に、同時代の文人が多く趣味とした南画を取り入れ、興のおもむくままに制作するようになったのだろう。専門家というより、地域周辺の余裕のある旦那方と交友をもつ中で、その画は風格と安定感を増していったと考えたい。

具体的に、松外遺墨自画讚作及び他者との合作を少し上げてみる。

〈①淡彩自画讚〉(図一)



図一 片野松外 淡彩自画讚

「洞裏春光麗似画 桃花万樹武陵源 乙卯盛夏 松外山人」
桃の花がつらなり咲くのとどかな風景。花に沿って民家が立ち並ぶ。氣候がよいのであるう、外の景色を楽しんでいる。手前には洞窟をくぐりぬけた小舟を描く。穴の中の水面にまで桃花が映つて、春満開の情景であることを詩画が物語る。

大正四年(一九一五)作。138×54センチメートル。

〈②秋景山水図〉

肌色の柔らかな色彩は、江戸時代以来南画で多用され「代赭」(たいしや)と称す。岩肌と松の葉を淡彩で描き、全体的に多めに設けた余白の中で効果的に生きている。手前の川と上方の空を余白でつなぎ、天地の高さと奥行きを表す。上空に添えた詩は、薄めの墨で書く。

昭和十年(一九三五)作。139×35。

〈③淡彩汀洲図〉

「日落山将暮 汀洲潮正生 甲戌晚秋 松外山人」
淡彩で秋の気配を表す。突き出た岩上で語らう高士、二人の右側足元には白帆が三艘みえる。僅かな描写で遠近感を漂わせる。

「汀洲」とは、水ぎわと中洲(なかつ)のこと。

昭和九年(一九三四)作。149×20。

〈④水墨瀑布図〉(図二)



図二 水墨瀑布図

「向天長嘯対風吟 膝又人横三尺琴

休道乾坤無聽者 高山流水亦知音 松外山人並題」

瀑布（瀧）に對應する人物のひざの上には詩にある通り、三尺幅の琴。しかし山水の天然美が無限の音を奏でている前では、ただ心を落ちつけるのみ。弾琴の必要はないであろう。

無紀年作。141×53。

⑤水墨瀧図

「松風匝地雨初収 激石奔湍沃々流

不信人間炎熱苦 山中六月氣如秋 松外山人並題」

白雲のかかる大瀧をみる高士。その水しぶきで六月の炎熱の苦しきも忘れ、まるで秋が訪れたかの如く清涼感を抱いた、と詩書に綴る。鑑賞者を画面に引き込む大幅である。

無紀年作。139×59。

⑥松外、他計三者合作 花卉（かき）図（四三）



図三 松外、他計三者合作

急須台に「丙寅夏日見附客舎 松外山人」、右の椿と花瓶を「青坡山人」、下方の石に「松南、作石」と署名あり。

白梅の枝ぶりのよさと椿の紅色が目をはひく。茶を点て風流を歎談しつつ、このような作が即興で作られていった。

大正十五年（一九二六）見附を訪問した時の合作。138×34。

⑦松外、他計四者合作（四四）

「閑堂相對思深々 清話風流似遠林

戊辰春日嵐城客中極楽精舎楼上偶相会四仙席上戲之 太華山人併録」

高台上の急須を描くのが「松外山人」。左の奇石は「南風散史」。左下の籠



図四 松外、他計四者合作

を、「静園」が描く。「太華山人」の画讀によって制作年が分かる。昭和三年（一九二八）作。134×33。

例えば④詩は「答人間近況」（人の近況を問ふに答ふ）と題し、『東華』誌に寄稿した詩を殆どそのまま用いている。「天に向かい長嘯し風吟に對す。膝上時に横たう三尺の琴。道^いうを休めよ乾坤空しく落々と。高山流水亦た知音。」（原漢文）と別詩にはある。詩意と画意の何れが先行してのことかは様々なケースがあっただろうが、本作のように画技に添付して一層生気を放つ詩作を松外は多く残している。

⑥の大正十五年制作「見附客舎」中の三者合作や、⑦の昭和三年「嵐城客中極楽精舎楼上」作、これは四者合作。双方ともに今となつては合作相手の調査を難しい。逆に趣味家は巷間都鄙の区別なく、見附や嵐城（三条）のいわゆる県央地区にたくさんいた。それらが互いに歎談を尽くし詩書画の寄書交流を重ねるにつれ、文人たる総合的な素養が醸成されていったものとみる。

つまりは人々との接触、名家作の鑑賞体験が重要だった。今回松外旧蔵先人書画作品を通過して、その機が豊富にあったことが分かる。質・量とも目をみはる作家の作品を、松外自身の人柄の写し鏡と捉えたい。

松外旧蔵書画作から

例えば、幕末の三舟といわれる山岡鉄舟・勝海舟・高橋泥舟は、松外存命時代、今より人と書の名声が高かったであろう。松外旧蔵品に三者作が

揃っている。他、書と絵とを分けて概容に触れてみる。

漢詩作は尾藤二洲・細井平洲・佐藤一斎・太田錦城・立原杏所の人々、越人中、富川大塊は、松外より一時代古い。これらは敬愛して入手したのだろう。日高秩父の詩書は新潟で掛軸をあまりみない。依田学海（一九三〇年作）も稿者にとつて、日頃過眼しない。大槻磐溪・鱸松塘・田邊碧堂・大沼枕山・平野五岳・巖谷一六・東條琴臺などは全国的傾向で旧家のコレクションにしばしば含まれる。越人作では蒲生重章が珍しいと思われる。高橋竹介・朴齋そして武石貞松は含まれて当然の越人ともみたが、貞松作は松外への為書作。中之島の大人物で、松外は交流する中、兄事したのである。

絵を伴うものでは鉄翁・橋本独山・春木南湖、中では八百枝菖城との合作が稿者にとつて参考になる。菖城作はこれまで各地で散見し、その雅号の由来といわれる新発田ゆかりの人物とかねてみていた。この度、改めて調べると生まれは北蒲原郡佐々木村の野口家の人（一八七〇〜一九四四）。本名康三。明治二十一年八百枝家の養子となる。上京して日本初の歯科学校「高山歯科学院」に学び、同二十六年第一回生として卒業。新潟に開業。三十一年、三条に移り歯科医を開院（西方藤七編『県史の人物』参照）。本業の傍ら詩画をよくしたらしく、県北新発田周辺や柏崎に遺墨をみている人物だった。

地元ゆかりの人々に関しては、旧下田村の生んだ碩学漢文学者・諸橋轍次博士の本来に当たる諸橋家が栄町の人。諸橋田龍、その子の浜水父子の書作も、当地ならではの文人作としてみられた。とくに浜水にそすい浜水父子の斯華会派の仮名作家で、尾上柴舟に師事。関東大震災で帰郷、長岡高等女学校に勤務しつつ中央書道団体に属す。師・柴舟との共編『日本書道史』（S5・雄山閣）の著述があるなど、かつてはなやかな注目すべき活動をした人物であることを知った。

森山越山と広川操一作は、地元三条文人である。後者は、松外以降の同家コレクションになる可能性があるし、事実次代、また片野家ご子孫美江子様の嫁した大橋昭五様一族も書画の愛好者揃いで、若干蒐集品が混在している。

絵よりも詩書が多いのが松外コレクションの特色である。先述した『東華』の継続講読と詩の投稿と合わせ、詩作に心を寄せた人物像がここでも浮かび上がってくる。

また殆どの掛軸の裏面に、松外の筆による作者名が付記してあるのだが、それを見ると「翁」「先生」と呼称を区別している。また誰から譲られたなどの入手経路を書くものもあり、松外の各作家観が窺える。

山田寒山資料

松外蒐集品中。山田寒山作が二点（軸）、柱掛に詩書した一点計、三点がある。軸は何れも詩書で、

仏法無多子 寒山独歩風 詩書如落葉 文字本来空

松外先生和余韻見示疊韻却呈 支那寒山寺沙門寒山 未定（図五）



図五 山田寒山詩書 松外への為書作

この款記によれば、「松外先生」と詩をよみ合った折の作詩であり、直接的やりとりがあった証となる（紙本、130×33センチメートル）。なお「未定」と文末に付記するが、別作に

鉄筆伝宗旨 寒山独歩風 寸心千万古 文字本来空 寒山老人

としたためた二行書（紙本172×44センチメートル）を見出している。首句と三句の詩の半分の違いをみせるが、仏法の世界で自分の独歩を語る前作に対し、「鉄筆」即ち篆刻の世界での独自性を主張する趣旨に置きかえた内容である。

もう一作は得意の墨竹自画讀で、やや薄墨で細目の節と葉状を描いた右

上に

一二三竿竹 虚心聳碧空 山僧遊戲筆 不学画師風
支那寒山寺 沙門寒山(図六)



図六 山田寒山墨竹

と五絶詩を入れる(紙本、130×33センチメートル)。「首句」の「一二三竿竹」は、良寛「一二三、いろは」双幅を想起させる句である。寒山は中央の文人でいち早く良寛の存在を評価し、遺蹟巡りを果たしており、良寛ゆかりの地に寒山遺墨が点在している。

そもそも竹を画題、詩題にした例は古今許多あるが、松外にも散見出来る。

写到数竿竹 写し到る数竿の竹

勢将凌碧空 勢将に碧空を凌がんとす

夢游湘水岸 夢に湘水の岸に遊べば

一枕聴清風 一枕清風を聴く

右は「題画」と題詩した昭和九年八月作で、大意は自作の竹図をながめるうちに中国湖南省の湖水の畔に遊んだ夢を見て、枕元に清風を耳にしたという。湘水はかつて舜帝が九疑山で客死した折、娥皇と女英の二后が悲しみの余り湘水に入水し、女神となった。その際、二妃の流した涙がかかって当地の竹には斑点が生じたという。よって特別に湘竹、斑竹と称す。この故事を松外は知っており、それに基づき竹の詩を作った。首句の「写し到る数竿の竹」というように、画技にみる墨竹は手慣れた筆さばきである。

比べて寒山の墨竹の詩は「数竿」ではなく「一二三竿竹」と書き出し、続く言辞はあくまでも寒山自身の態度や主張を盛り込んだ内容で、先の松

外が教養を積んだ読書家の詩であるとすれば、寒山の方は型にはまらない、やはり独歩の感が滲み出ている。

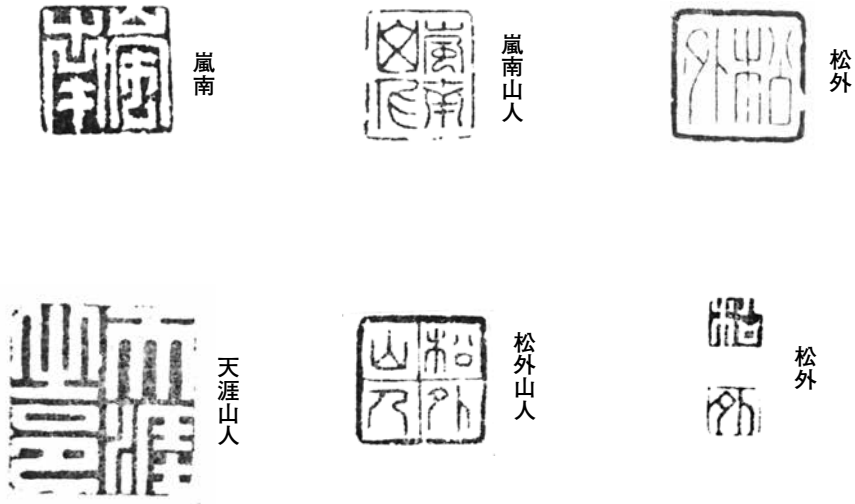
もう一つの資料

柱掛についてだが、大きさは縦180、横15センチメートルで、両面に書画がある。

一面には足元に箒を置く人物。手に経典を持ち、これは中国の唐代の逸士説話に登場する寒山拾得の寒山の方である。頭の上方には大きな蓮の葉を大胆に描く。左下に「天荒」と画を描いた人物の署名があり、下に判読不能な白文印を一顆押す。

もう一面に「泣露千般艸吟風一葉松 葉改様 寒山詩 寒山」と左上に一行の墨書をするのが、山田寒山の筆である。寒山詩の一節を用いるも、うち「葉」字は「様」字に改めるべきもの、と追記をし、署名の下に「田潤之印」白文印一顆を押す。下方に松並木を簡枯な筆意で描くのはまた別人の手によるようで、右下にやはり板上ゆえ朱肉が付き難いことにもよる、判読不能な朱文印一顆を押す。

木片の大きさから察して、寒山が携帯してきたものとは思えず、現地で地元の人々と交流をする中、寄せ書きし合った一枚と考えたい。二面に画があるので、何れかに松外の筆が含まれていればよかったのだが、それらしき部分は見出せない。寒山が寒山詩を用い、詩書に符号して天荒なる人物が寒山像を付描する、参集の人々が意気投合して成った一作とみている。先の松外の合作にも含まれていたように、今日調査し得ない趣味を嗜む人々が地域におり、この柱掛に窺う書き手も現在のところ分りかねる。片野家に伝わったこと、寒山の松外への為書作が現存することから推究して、本作も寒山との直接的な交わりを考究するための資料として挙示したい。



図七 松外自用印・印影（原寸）

松外の自用印

松外の遺物中もう一つの視点に、自用印を数多く残していることに稿者は興味を抱く。数は三十二顆、地方の文人画家では多い方である。

中に果して寒山刻が含まれているか、探索したところ、それはなかった。少しく似た刻調のものがあつたが、寒山ならば側款を入れたであろう。

側款を仔細にみていくと、無字の作が殆どで、印材の質と刻風から察して松外の自刻かと思われる。各印何れも一作の中で文字の大小を付けず、全文字を同じ篆書体のモードで整えている。規矩を外さない真面目な仕上がりが、得意とした詩趣、詩情にやや欠ける。守法に止まり個人の意は石面に吐露されていないように映る。

別に側款のあるものを挙げる。「越南刀」とあるのが二顆、篆書体の字形に不安定さを覚える。「越」字を名乗ることから地元、地域の趣味家の手によるものか。

「昭和七年上流 為松外先生 白菟刻」とあるものは松外七十一歳時に贈られた印。この白菟なる人物は計三顆を刻している。装飾的な印篆を用いるが現代の研究が進んだ観点からみれば、前時代的な所業といわざるを得ない。

総じて松外自用印では数のわりに評価に値する刻印の少ないこと、これは先人に対しいささか礼を失した言い方になってしまうが、反転してみれば地方文人の大半が同類の印章を、せいぜい数顆保有する例が一般的だった。

事績不詳の刻者と比べ、同時代の山田寒山刻を手にとると、無用の細工を避け、斬新さよりも古体派をよく咀嚼した上で骨格の確かな、朴とした寒山調が確立されている。

なお寒山以外の同時代前後の印人も越後に足跡を留め、全国の他地域と比べ、調べる手がかりを多く与えてくれる。その手がかりこそが片野松外の如き各地の吏長、素封家、地主層の趣味性に見出されるのであって、ゆえに稿者は文人墨客の受け皿となつた、これら文士の調査を継続している

わけである。

詩書画篆刻をよくした人を「四絶」と称すが、全て一定水準をこなした人物を簡単には見出せない。とくに地方にあっては来遊文人との直接的接触による手ほどき、あるいは良質の正統的な参考書がなければ難しかった。松外の場合、他の越佐の画人詩家の中でみると、詩と画の道をこれほど入念に併存させた例は多くない。篆刻は抜き出たものをみせないが、全体的に温籍さを漂わせ、文人の嗜みの一つとして愛好した節が十分看取される。これ程多くを手がけたのだから、何か印刀を握る契機があったはずである。寒山との出会いがそうさせたというためには、寒山所刻が残っていないのが不可解で、短絡的な解釈は出来ない。

交友の一例

『東華』(S12・4)に「悼南涯詞宗」の題詩が載る。「訂交、益を得ること多し。言訥なれども筆、神に通ず。天地遺稿を留む。文章長とくに真を見る。」(原漢文)、土屋竹雨が「竹雨曰く、其人亡すと雖も其文は千古」と評す。

古川南涯(一八八二―一九三七)の逝去を悼む松外の詩である。越後加茂の人。『南涯遺集』(S14刊)を残す。同じ中越地方ゆえ、また同好の士として交わりが深く結ばれていたであろう。「言訥」、口下手だったが文章は旨かったとは、日頃の往来なくしては記述し得ない。

『南涯遺集』(全三冊)を改めて確認してみると、残念ながら松外のごとに触れた題材はなかった。ただ中に「寒山来訪喜賦」「次寒山詩」の二詩を見出した。前詩に「平章風月詩千首。棄擲功名酒百杯」とあるのは、寒山の人となり相手がどのように映ったのかを読み取れよう。

松外詩にも詩題に寒山の名があるか、今後の調査課題として残る。

文人松外の全体像

現在残る松外の画作で最も古いのは、大正四年(一九一五)五十四歳作

である。教員時代、また退職後も村長をはじめ要職を兼任する中で、絵筆を多く執るのは難しい。所謂三条文人と称するように、栄町隣地周辺には、世に名の通った画家が何人も輩出され、松外にとってよき交友者、師となつたであろう。

それらの画家は画のみを専門にするのではなく、紙面に詩を書き、また書技に才を発揮した総合的な教養人だった。松外の画技も詩書画が揃っている。和歌を書いた揮毫作はみない。詩の揮毫作でも、書のみは少ない。伝わったのは画作が多い。詩稿によって作詩の鍛錬をしたのだろうか、肝心の山田寒山との接点も、松外の詩に和韻した形で寒山詩が残った。文士の往来と交流は詩が媒体となる例がスタンダードで、松外と寒山の間柄もその型にはまる。

『東華』創刊時からの参加により、中央の名流との交わりを得、生涯斯道に専念する。詩の嗜みは『東華』参加より早く、遅くとも昭和三年、六十七歳にはこの道に抱負を有していたであろう。『大正五百家絶句』に詩が収載されている点から、さらに詩への取組の時期はさかのぼる。先に述べたように、画の古いものが大正四年であるから、大正期には詩書画一致の文人の歩みを始動していた。稿者のこれまでの調査によって寒山の来越は、大正四、五年と判明している。松外への為書作も、この頃の直接的やりとりの間で制作したものと推知できる。これは松外の詩書画への取り組みの出発時期を探る目安にもなり、寒山の来越した大正初期には脂の乗った文苑時代を迎えていたと思われる。

結語

本稿は寒山の動向よりも、むしろ松外の文人的歩みに言及することに努め、松外を通して寒山が越後路にまいた種の発芽、中央文化の伝播の一端を分析することを試みた。

松外の画業は本人にとつてあくまでも余技で、画に足りない点を詩書、画讀を付して補足した。大粒の書作を残していないように、本人は画と一体を成すものとして書を残した。そもそも、詩書画三絶の道を目指すのが

日中文人の理想像となつて、紙面上、丁度書と画は補い合うものであった。松外の場合、加えて篆刻も趣味に属し、その手によると思われる遺刻がまとまって伝わる。これは他の同時代の越佐文人と比べ異色であり、印技は特色を表したのではないが、詩書画同様に自娛の性情を發揮し、周囲からは一目置かれていたであろう。詩書画、篆刻を四絶といい、文人の目指す最高の境地だが、松外も生活圏の大幅に居住しつつ、よくこれを意識した尊い姿勢を保った。地方在住の人々にとつて重要なのは、しばしば来訪した上方や江戸流行文人との面会で、寒山はその来越者の一人であった。松外の文苑での成果は、『東華』誌を仔細に窺えば定期的に動向が記録されている。大正、昭和初期に会員制による様々な文雅の機関誌が発刊されたことは、一面、地方の要求に応じた添削指導を可能にしたのだった。

結びに、松外の曾孫で大橋昭五様の御夫人・美江子様は、稿者の主宰する越佐文人研究会に早くから入会してくださり、御主人様ともに日頃数々の資料提供を受けてきた。そこで、かねて御報恩と考えていた企画展「片野松外とその周辺展」を、令和元年十一月九日から十一日まで松外のあるさと旧栄町農村環境改善センターにおいて開催するお手伝いをさせて頂いた。松外が生まれて一五七年、書画の鑑賞の背景に、地域の自治功労者のおもかげを偲び、幸い四百人余りの来場者があり、盛会となった。

曾祖父の松外が亡くなったのは、美江子様が小学校一年生の時、小さかったがその姿はよく覚えておられるようだった。家の中にたけの子が生えてきたのを、天井に達するまで切らなかつたというから、まるで良寛の如き生活であった。肉親の方にしか語れない人物像を紹介し、小稿のまとめとした。

片野松外とその周辺展

期 平成30年11月9日(土)～11日(日) 10時～16時30分
場 農村環境改善センター(三条市栄公民館)
〒951-3条市新栄二丁目
TEL 0256-451685 (入場無料)

主 催 片野松外とその周辺展実行委員会
後 援 三条市 越佐文人研究会
 南蒲原郡大面村(おおもむら・現三条市)
 三 条 市 郷土ゆかりの教育・自治行政の中心となつた片野松外(本名幸次郎・一八六〇～一九四二)の書画篆刻作及びその愛蔵品の特別展示。郷土ゆかりの文芸に親しむことを通じて、三条市広域における旧栄町地区の歴史文化を振り返る機会とした。



松外未達廟自画像

表 彰 嘉 賓

片野松外 諸橋田龍・浜水父子 高橋竹介
武石貞松 八坂板島城 浅野赤城等旧郡内人、富川大塊 丹羽慶孝 増村村斎 渡辺湖葉等県内人、春木南湖 幕末の三舟 中林桂竹 山田寒山等著名家、

中林桂竹 墨竹園

講 演 会 11月10日(日) 13時30分～15時
 園村鉄琴(新潟大学教授)

鑑 賞 会 講演会終了後会場にて
 片野松外(の生きた時代)

片貝晋介(一般社団法人太安全同人)

問 合 せ 先 〒951-3条市岩崎十五 園村郷守斎
 TEL 0256-4512595
 〒955-3条市鹿嶋五八 大橋美江子(松外の曾孫)
 TEL 0256-462210

図八 「片野松外とその周辺展」案内状葉書